

# 山形県民教連通信

<http://www.asahi-net.or.jp/~gy6e-kjm/>

2017.12.03 No.63

## Contents

巻頭言「県教育長答弁に対する評価」	... 1
県民教連「冬の学習会2018」のおさそい	... 1
東北民教研「岳集会」参加報告	... 2~7
全生研福島大会に参加して	... 7
本の紹介	... 8

山形県民間教育研究団体連絡協議会 通信  
 <発行人> 山形県民教連事務局  
 〒990-0044 山形市木の実町12-37  
 県教組山形地区支部内  
 TEL/FAX 023-631-2112/2126  
 E-mail yamagata@yamagata-kenkyouso.gr.jp  
 <編集人> 鬼島 悦雄 kijima@e.email.ne.jp

## 巻頭言



### 県議会における 県教育長答弁に対する評価

県民教連会長 早坂 久佳

10月2日、県議会9月定例会予算特別委員会で、渡辺ゆり子議員が全国学力調査に関わる質問をおこないました。これに対する廣瀬教育長の答弁について検討してみました。

(県教育長答弁)・・・次に全国学力学習状況調査でございますけれども、これは文部科学省が示す、学習指導要領の定着度を見るものであり、知識・技能・思考力・判断力・表現力、そして学びに向かう姿勢など児童生徒の学力全体についてその状況を検証するためのものであり極めて重要なものであります。具体的な調査方法であります。学力調査においてはA問題は知識技能の定着状況をB問題は活用に関する力、そして児童生徒質問紙では、児童生徒の学習に係る意識や実態などを見る構成となっております。調査の趣旨ですが、調査によって測定できるのは学力の一部であると

しながらも、学指導要領の進捗状況を図ることやその結果から、多面的な分析を行い、教育及び教育施策の改善に向けて取り組むことの重要性を強く示しております。

「測定できるのは学力の一部としながらも」と質問に反論しながら、学力の一部の分析と教育及び教育施策の改善が重要だとするならば、何をなしているかということ。

点数だけの分析で終わっていませんか。それでの知事コメントやそれを受けての教育施策は、学力の一部に対してのみ行われているということになります。

施策の1つが過去問の提示では、お話になりません。

「算数・数学チャレンジinやまがた」や探求型学習の「小5中2へのテスト」は各学校で取り組んでいる毎回の分析に基づかないで、「活用力」「応用力」で組み立てているのでプラスに働いていません。

現場ではとは全国学力テスト対策としか見ていません。さらに、それでも良しとしない結果が出てくることにどう総括しているのか、「道半ば」では何の総括にもなっていません。

リテラシーとは、「読み書き能力。また、与え

## 民教連「冬の学習会2018」に参加しよう!

日時 2018年 **1月13日(土)** 13:00~18:00 会場 山形市 ヒルズサンピア山形  
 <集会の主な内容>

講演「なぜいじめはなくなるのか?」- スクールカーストという階層関係 -

講師 鈴木 翔 氏

(秋田大 大学院理工学研究科助教『教室内(スクール)カースト』光文社新書の著者)

各教科の分科会・

実践講座・ワークショップなど

詳しくは、別途集会案内をご覧ください。

られた材料から必要な情報を引き出し、活用する能力。応用力。」という訳がありますが、暉峻淑子さんの「豊かさとは何か」の中で、ヨーロッパで言うリテラシーとは、今芽が出なくても長い目で後につながる学力をさしています。練習問題とか過去問で対策に躍起になって、それで高まるものではありません。また、それをはかろうとする全国学力テストのB問題の中身と採点方法を精査しているのでしょうか。B問題のそうでなければならぬ採点のやり方に意見すべきだと思います。

(県教育長答弁)・・・そのうえで、学ぶ喜びということでありませぬけれども、つまるところ、自発的でそして主体的な学びの姿勢を醸成する。或いは興味関心、学び続ける意欲などを醸成することでありませぬけれども、本県でそのために行っているのが探求型学習ということでありませぬ。探求型学習の過程におきまして、児童生徒が主体的協同的に授業に参加することを通して、確かな学力を育成して、学ぶ楽しさ、学ぶ価値ということが実感できるようにしていきたいと考えております。

全国学力テストB問題攻略とも言うべき「アクティブラーニング」と「活用力」のための「探究型学習」は、子ども達にとって力を伸ばすもの

になっているのでしょうか。まだ十分な知識が形成されていない中での探究型学習は苦痛になっていないでしょうか。まさに指導法で何とかしようとする古い学校研究みたいなものです。

新学習指導要領では、「アクティブラーニング」の言葉は一切出しておらず、論点整理の中で「指導法にこだわるあまり指導の型をなぞるだけで意味のある学びにつながらぬ授業になってしまったりという恐れも指摘されている」ということで、アクティブラーニングを意図的に「主体的・対話的で深い学び」に置き換えることになりました。

できないことを責めるのではなく、できたことを喜んであげる日常の授業を大切にしていかなければなりません。そして、わくわくする授業にするには、指導法ではなく教材そのものの特性を活かして授業を組み立てていかなければなりません。

全国学力テストと本県の探究型学習は、現場の日常的な授業いわゆるカリキュラムに負担と混乱を持ち込み、プラスに働いていない現実を受け止めるべきです。

教育行政の本来の役割を認識し、学習内容や研修内容に口を出すのではなく、教育環境整備に努め、子ども達や教職員が学びやすい教育環境を第一義に考えるべきです。



## 充実した東北民教研「岳集会」(8/10~12)

～山形県から22名が参加して、学びを深める～

8月・夏の東北集会は岳温泉あずま館が会場。私は前回「3・11」の夏に参加していたので当会場は2度目。今テーマは「憲法70年、命を守り平和をつくる学びを子どもたちとともに」である。昨年の男鹿集会に続いて多彩で内容豊かなものであった。

基調報告では、今日的な改憲への動向や立憲主義がないがしろになりつつある状況を踏まえ、「教育現場が子どもはおろか、生徒や教師たちをも、競争と管理のなかに翻弄され、一層厳しいシフトの中であえいでいる実態」が炙りだされた。東北民教連は「北方性教育運動の継承～～目の前の現実に即して深め合って行こう...」のテーマでの方向づけでの提起が種々になされた。

また、あの震災より6年、未だ道半ばの復興の遅延が、ここ福島にも深刻な影を落としている学校現場での実態と、そのなかでも「地道に奮起し取り組む教師たち・市民たちの動き」が紹介され、今集会の特徴になっているという。

基調後の特別分科会では、以下の報告があった。

農民連の根本氏。福島避難の厳しい現況を紹介しながら、「不十分で不公平な復興・救済策」の中での地域変貌は、市民・農民の意識まで変質させるという。共感の欠如と分断の社会が展開されていると。放射線の管理地域で、営農を継続し



つつも“自分たちの世界を創る絆”を構築したいと願う。東電のエネルギーにのみ左右されない電気の「自給化」を促進しながら、“自らの主体的な地域経済づくり”を模索したいと。

さくら南保育園の斉藤・丹治氏は、震災以降、放射能と向き合いつつ保育せざるを得ない6年間の実践を語る。本来、園庭遊びはもちろんのこと、近隣の野山・自然の中で、のびのびと体験することによる「情操豊かな成長」が本懐なのに、放射能に怯え、除染の隙間で不安と闘いながらの「育て」は想像以上のものがあるという。行政に繰り返し除染要請をしながら、5年目にやっと近くの野山「城山」への遠足ができた。子どもたちの「満面の笑顔」が感動だったという。

佐原報告。あれから6年5か月の福島現状～ 1)セシウムは除染後下がったとはいえ、土壌に沈着は変わらず。 2)双葉地域は3地域の避難に。 3)避難者は、6年の間大きく減少はしたが、増え続けているのは「関連死」。 4)除染の粗雑な実施は、各地でトラブル続き。

2017年7月に、やっとロボットが原発3号機格納器内に入り、下部調査が実施されたという。…そうしたなかで「子どもの教育の現状」は厳しい。避難自治体では、児童・生徒数は震災前の3割以下に減少、仮設住宅での子どもの学ぶスペースはないに等しく、劣悪な教育環境の中で、不登校生徒も多い。

子どもの発達の異常は、体力低下・運動能力低下・ストレス増加など各分野に及び、県の強進する「学力向上」なんてほど遠い実情にある。さらに加えて、国からの要請も加えての「放射線教育」では、“原発には触れないように”の指示があり、現実・実態回避への意図が明白である。原発への「安全神話」はこれだけの深刻な実態の渦中にあっても、国・行政からの振り込みは止むことがない。教師たちは多くの市民と共に、「原発への、ほんものの危険な事実」を学習すべきであると訴えている。  
(田口 忠宣)

## 「社会科と教育」分科会報告

田口 忠宣(山形歴教協)

今テーマは、1)震災・東電福島原発事故から6年、2)地域の掘り起こしの実践、計5本のレポートがあった。以下各レポートの概要である。

福田(福島)報告は、6年前から「3・11」を体験した生徒たちに原発学習を継続してきたが、今回特に、原発アンケートを軸にして4時間の「原発実践」を試みた。アンケートでは被災の状況や避難の種々の体験での苦悩が赤裸々に出された。原発の危険な実態や、復興への思いの交錯する中で、「福島でこれから、いかに力強く生きてゆけるのか」が課題となるであろうということだった。

衣山(福島)氏は、自身の壮絶な戦争体験を詳細に紹介しながら、「原爆孤児」のある男性との出会いを描き、その生きざまを通じて、戦争の醜さや愚かさなどを1冊の記録にまとめた。あれから70年余りの経過の中で、戦争と平和が風化しつつある今、80代の高齢者には聞き取りさえも不可能になっていると。

中島(岩手)氏は、自身の勤務する大学での授業からの報告であった。「核兵器と軍縮」のテ-

マでの講義後の感想レポートでは、生徒たちの種々の世界観・戦争観・平和観が見てとれた。彼ら、若者たちの生活意識は多様であると。

渡部(秋田)氏は、戦後新憲法の学習指定校となった能代二中での憲法学習についての取り組みで、「新憲法漫画いろは歌留多」について紹介した。

歌留多は同校の職員が作成し、絵柄は地元の漫画家の作だというものである。当時の生徒たちも今は80歳余、元気な彼らは「国民主権・象徴天皇など、遊びを通じて面白く学べた」と語る。また、その歌留多に込められた「新憲法への熱意」は、同校校歌にも反映され、平和希求への思いが熱かったというものである。こうした流れは、中央の「憲法普及会」よりもはるかに“憲法理解”が深く、歓迎されていたものと言われている。

秋田県内でも、新憲法への受け入れについては、各市町村で様々に実施されたが、その理念は、想像以上に熟成されていたものと思われる。今なお若者や生徒たちに語りかけているのでは……と。

金拓郎(秋田)氏は、秋田での「小学校副読本の変容と課題」について発表した。県内でも「平成の大合併」以降多くの市町村合併が実施され、その減少率は東北でも最大であるという。その結果地域の変容が余儀なくされ、「副読本」は地域

の実態から次第に離反し、生活実態からの内容が欠如しているという。

また、編纂や作成が今日的なデジタル化の中で省エネ化も進み、「調べ学習」や「体験活動の手助け」の役割さえも、その機能が歪んでいるという。どんな副読本が今必要なのが課題であると。

以下、若干の討論からの……私の感想を少し。

復興道半ばの実態は様々に出されたが、6年余りの経過の中で、避難指示解除地も急増した。しかし帰還は進まない、簡単に故郷には戻れない「現実」の重さは深刻である。子どもたちは時間と共に成長する。彼らに「福島で主体的に、生きる術」はどこにあるのか？ 教師たちも必死に模索している。一方で、青森も含めて福島でも「原発再起」の動向が膨張している現実があるという。平和に生きる私たち「一人ひとり」にとっての「確かな情報」をもっともって共有しあい、子どもと共に考えることが急務である。防災教育は、まさに私たちの「生きるため」の課題である。

改憲への地ならしや、北朝鮮からの挑発激化などのあわたしい情勢は、否応なく国防・軍事強化のシフトへと連動し強まっている。過去の戦争意識の風化と相まって、平和学習が一層困難になっている現状がある。戦争を知らない世代の子ども・若者たちにどう向き合うのか。“日常の中の基本的な人権も徐々に歪められている”……ことに気付かない。

しかし、「震災復興」や「原発事故処理」「地域実態に即した街づくり」「市民のための祭り」等々、平和を標榜するひとつの「絆」の構築を目指す日々の暮らしのなかに、そのエネルギーを見つけない。真実を学び、知り、学習する意識が大切。子どもと共に、「どんな地域を創るのか？」を共に学び合いたいと思う。私たち教師はその「共働」の中で、九条の浸透する「平和」を保持したい。

すべての小学校などで使用する「副読本」も、教科書の単なるサブ(副)ではなく、地域のリアルな実態を描く資料であり、平和に生きる指針を示すものとして捉えたい。ならば、子どもたちもその作成にも参画できる「戦争と平和の詰まった」テキストでありたいと願う。

現代社会が極度に保守化して、「平和」を叫ぶ事さえ怯む風潮がある。福島では日々の雑談・日常会話にも「原発事故」「3・11」は登場しないという。

しかし、そうした中でも、子どもたちは極めて

柔軟な発想・意識を持っている。中高校生も同じである。個の豊かさは素晴らしい。多様な社会の反映とは思うが、私たちの教育実践も、そうした「多様さ」のなかでの民主主義が醸成できることを目指したい。国家や行政からの強圧的な「指導」が一層強まることは必至である。東北の各所で、仲間たちが必死に「実践」を重ねている。時には「個」であり、「線」や「塊=集団」にはならないことが多々である。しかし、それでも継続は力として不滅だ。今後とも、山形でも、仲間と共に更に奮闘することを決意した。

## 特別分科会に参加して

漆山 美子  
(山形地区支部)



今回特別分科会「特別」な支援を必要とする子どもが生きる学級・学校づくりにレポーターとして参加してきました。

最近学級では、特別な支援を必要とする子どもへの対応に苦慮しています。担任一人では抱えきれぬものではありません。対応を校内体制として支援できないか、本校の支援体制を紹介しながら、今の私の考えを発表してきました。

まず、特別支援コーディネーターを機能させること、そして、校内委員会を定例化することが大事であることをお話しました。そこからもらったアイデアをもとにして、担任ができること、学年でできること、学校全体で取り組むことを分けて支援を始めることが大事です。また、校内委員会で合意形成された対応を行っていても、なかなか成果が見えず、対応をやめてしまいがちなのですが、うまく対応をしても子どもの行動が変わってくるのは早くて3ヶ月、特性によっては半年、1年以上と長くかかります。そんなときに担任を支える周りの先生・学校全体の良い雰囲気も必要であると考えています。

今回、参加したみなさんとの話し合いでアイデアをたくさんいただいたので、それをもとに、また学校で支援を進めていきたいと思いました。



## 生活指導分科会に参加して

大場 理之(山形生研)

今年は10名以上の参加者がありましたが、参加者は地元福島が多く、あとは秋田・山形からでした。

一日目は、東北責任者の大谷敏彰さんによる子ども集団づくり入門とADHDの子を中心とした学級づくりの実践報告でした。大谷さんが学級で取り組んできたことを話してくれました。例えば、「得意なものでクラスを引っ張る」「学級の様子を見て、子どもたちの人間関係をつかむ」「当番と係を分ける」など。

後半は、ADHDの男の子について、母親はネグレクトで二次障害を起こしている子への実践報告でした。学校に居場所がない子に対して、その子の行動の背景にあるものを共感的に理解すること、自他の相互尊重の理念にねざした人間関係を構築すること、家庭に対しては、話し合いを通して信頼関係を築き支えていくことが大事だということでした。

二日目は、中学校の実践レポートの予定でしたが、レポーターが来れないということで、小学校2年生の学級会を通しての学級づくりの発表になりました。学級会での話し合いを通して、めあてや係、マークを決めたり、ゲーム大会を提案し取り組んだりしてきた発表でした。なかなか学級会の時間が取れない中、丁寧に取り組み、みんなで決めると楽しいことができることを子どもたちは実感することができました。取り組みが中心だったので、どういう話し合いになったのかは、ありませんでした。

三日目は、伊藤弥さんの実践レポートで、福島

の子どもたちが、東日本大震災や福島原発事故について考える授業実践でした。福島の現状は、原発事故や被害のことをタブー視するところがあり、復興優先のところがあるということでした。子どもたちに、いかに当事者意識を持たせるか、また、分断や風評を乗り越えて、地域で活動している大人たちに出会うことで、人間として生きることへの尊重を学ぶ取り組みでした。子どもたちは、学びを通して、現状をとらえ考えるようになる姿が見えてきました。

今回は、分科会を全日程行うことができました。福島の先生方が全国大会もありながら、準備してくれたのは頭の下がる思いです。残念なのは、中学校のレポート発表がなくなり、中学校の参加者が他の分科会に行かざるを得なくなったことや、発表者が福島の先生のみで、他県からのレポートが1つもなかったことです。他県の責任者と連絡を取って、レポートを確保し、班分析をして、みんなで学ぶ形だとよかったのではないかと思います。

## 原発事故の被災地を巡る『現地研修』に参加して

鬼島 悦雄(科教協山形)



東北民教研の理科分科会では例年3日目に「理科巡検」をおこなっているが、今回は全体企画の『現地研修』に代えるとのことなので、一も二もなく参加を申し込んだ。

当日は、山形から夢田さんと私、庄内の庄司さん、佐藤夫妻の5人が参加。集合場所からバス一台に乗り込み、午前8時過ぎに二本松を出発した。

案内は、当時高校の教員だった松本佳充さん。途中からNPO「野馬土」の天野和巳さんも加わった。飯舘村を通り、役場でトイレ休憩。庁舎前にモニタリングポスト。

庁舎の2階にも。注意して見ると、車窓からもいくつかモニタリングポストを見つけることができた。ただし、それらは公共の施設あるいは公的な土地にしか設置できず、必ずしも全体を網羅しているものではないとのこと。数値もさまざまであった。



飯舘村に入ると、田んぼに黒いフレコンバッグが積み重なっているところが目立つようになった。除染のために剥ぎ取った汚染土の仮置き場だ。

常盤自動車道（南相馬IC～浪江IC）を通り、浪江町に入ると、黒いフレコンバッグの丘は延々と続くようになった。最初の立ち寄り先「希望の牧場・ふくしま」へ。代表の吉沢正巳さんから熱い話を聞く。

吉沢さんは国からの殺処分指示に抵抗して、売って回収できる見込みのない肉牛、約330頭に餌をやり世話をし続けている。電飾をつけた牛のハリポテディスプレイを引いた車で国会まで抗議行動に出かけ、福島の実況を知らせる講演活動を続けている。吉沢さんの言葉が印象に残った。



「売れない牛を飼う。牛飼いは牛を見捨てない。牛を飼い続け、絶望の中に希望を見出す。」



途中、案内の松本さんの自宅が見えるところに立ち寄った。自宅の周り是一片の水田だったが、鬱蒼と伸び放題の柳などに囲まれて、まったく違った風景になった。玄関や扉はイノシシに突き破られ、中の冷蔵庫などが荒らされ、布団が押入れから引き出されてねぐらが作られていたようだ。

浪江駅前、車通りはほとんどなく、人の気配もない。町の姿はあるが、まるでゴーストタウンのよう。震災前人口2万人の町の帰還者は、わずか200人のみ。常磐線浪江駅は震災以降営業を停止していたが、今年4月より下り線（相馬方面）が開通し、営業を再開した。三番線のみで使用で、一・二番線には仮設の通路が渡されていた。



海沿いへ向かう。漁港のある請戸地区だ。太平山霊園で慰霊碑を見る。小高い霊園から周囲を眺める。一面の原野のように見えるが、以前は家々が立ち並び、田畑も広がっていた。それが津波で家もお墓も流され、たくさんの犠牲者が出て、



救助の間もなく原発の避難指示によりこの地を離れることを余儀なくされた。異様な姿の減容化処理施設（汚染土の容量を減らす施設）と、海側にぽつんと残った請戸小学校が見えた。

請戸小学校の前で話を聞く。塔に設置してある時計が、津波をかぶった時間を指したまま止まっていた。津波の報をうけ、上級生は下級生をかばいながら近くの丘まで走って避難し、奇跡的に全員が無事だったという。南の方角の林の中に、福島第一原発の煙突が見える。原発はわずか6km先。

請戸小学校の前で話を聞く。塔に設置してある時計が、津波をかぶった時間を指したまま止まっていた。津波の報をうけ、上級生は下級生をかばいながら近くの丘まで走って避難し、奇跡的に全員が無事だったという。南の方角の林の中に、福島第一原発の煙突が見える。原発はわずか6km先。



予定していた見学地を回り終え帰路につく。いたて村道の駅「までい館」では、オープンイベントがおこなわれていた。新しい建物で、これまで見てきた被災地の有様とは、そこだけが別の世界のような賑わいがあった。

一日の現地研修を終えて、原発事故による被害がいかに深刻なものか、被災地を間近に見て改めて体感することができた。圧倒的な現実を前にして、思うこと、考えることが多すぎ、未だに頭の中が整理できないでいる。

戻れる見通のない帰還困難区域の荒れ果てた故郷。仮置き場がそのまま永久貯蔵施設になりかねないフレコンバッグの山々。避難指示が解除になっても帰還者はたった1%という現実。そんな困難な中でも、吉沢さんのように負けずに生きている人々がいることに、一筋の希望も感じている。



## < 研修報告 >

学びがいっぱい！  
いつも楽しみな全生研  
全国生活指導研究協議会  
福島大会に参加して



設楽 隆雄  
(山形生研)

受付では「こんにちは」「よくきてけたね」という言葉を交わし合った。福島の前関先生、大谷先生はじめ東北の仲間と笑顔であいさつを交わす。これがまたうれしい。

今年の全国大会は、原発事故から7年目を迎える福島での開催でした。約500名の仲間が全国から集まってきて、大会主題「福島につどい、子どものしあわせと教育の課題について考えよう」について熱い議論をかわしました。そして、「人間として生きることの尊厳」を問い続けました。

私は、2003年の山形大会前後から15年くらい全国大会に参加しています。その魅力は、一つは、全国の多くの仲間に来て元気が出ること。二つ目は、実践のアイデアをもらうことができることです。昨年も「ぼくたちだってできるモン」という実践を教えていただき、学級で実践して学級

が明るくなりました。また、開催地の町の様子を実際に見たり、観光をしたりすることができるのも魅力です。

今回、私は「リーダーのいるクラスをつくる」分科会に行きました。4月から、自分の実践にはリーダーづくりの観点がなかったことを反省し、「リーダーづくり」の本を読んでいたからです。分科会では、リーダーを育てながら文化祭に取り組んだ実践や、みんなの居場所をつくる中でリーダーたちが育ち活躍している実践などを、みんなで分析し合いました。

そして、学んだことは、

リーダー指導の必要性

集団には目的がある。目的を達成させるために、みんなの気持ちをまとめ、引っ張っていくにはリーダーが必要である。だから、真のリーダーとは、教師の考えを代弁する子ではなく、子どもたちの思いや願いを実現しようとする者である。学級の課題、思い・願いなどの分析を教師と共有できる子を育てていく。

リーダー指導で大切なこと

対話と討論である。活動を通して影響力のあるリーダー的な子どもを見つけ、対話していく。そのことが学級分析となり、分析する眼を育てていくこととなる。また褒めてあげたり、方向性を与えたりしていくことが大切である。また、班長会での指導が大切である。

・・・などを学ぶことができました。(もっとたくさん学びました。紙面の関係で。)

夜は、県内の仲間と福島町の町にくり出しました。ちょうど、わらじ祭りが開催されており、福島の活気あるエネルギーを感じることができました。仲間と飲むお酒はおいしかったです！

来年、神奈川大会です。県内の若い仲間を誘って参加したいです。



本の紹介

『小さな自治体の大きな挑戦』

―飯舘村における地域づくり―

『地域に根ざす学校づくり』  
―子どもが主人公の学校改革を求めて―

地域と教育の会 毛呂敏弘

境野健児、千葉悦子、松野光  
伸共著『小さな自治体の大きな  
挑戦―飯舘村における地域づく  
り』(二〇一二年二月刊) 八潮社  
二八〇〇円十税

境野健児氏には二〇一六年に  
第四一回地域と教育の会の全国  
集会福島大会で講演やフィール  
ドワークなど大変お世話になっ  
た。

そして、飯舘村の元副村長の  
長正増夫さんから村の様子を  
お聞きした。

村では原発災害で放射線の大  
め避難生活を余儀なくさせられ  
るなどの弊害がでてきた。

その一番は地域のコミュニ  
ティが崩れたことだった。ばら  
ばらな避難生活で人間関係もば  
らばらになってしまった。

震災ではほとんど影響はな  
かったのに。計画避難地域に指  
定され一か月以内の全村避難の

指示が政府から出された。除染  
をしながらの地域づくりという  
重い課題を抱えることになった。

この本は震災前に構想し、執  
筆された。福島大学行政政策学  
類では飯舘村は「地域づくり学」  
を学ぶ貴重な学習基地になって  
いる。

飯舘村という小さな自治体が  
長年取り組んできた大きな挑戦  
が地域の大学を動かしたという  
メッセージを読み取りたいし、  
全村避難という苦難に直面しな  
がら諦めることなく逞しく新た  
な挑戦を始めようとしている飯  
舘村を応援したい。

小さな自治体の  
大きな挑戦

飯舘村における地域づくり



仲田陽一著『地域に根ざす学校  
づくり―子どもが主人公の学校  
改革を求めて』(二〇一六年一〇  
月刊) 本の泉社 二八〇〇円十税

仲田陽一氏は、この本で、  
一九七〇年代以降の「地域に根  
ざす学校づくり」実践の多くの  
事例について紹介されている。

「地域に根ざす学校づくり」  
を教育実践の一つと捉え、戦後  
「民主教育」の歩みの中に位置づ  
け、具体的な姿に迫るものであ  
る。今「子どもを通わせたい安  
心と信頼の学校像」とは何かを  
読み取ることができたらう。

地域と教育の会創始者の渋谷  
忠男は、高度経済成長による農  
村の変貌をとらえ、「地域に根ざ  
す教育」の創造を目指した京都  
府・川上小学校である。「地域生  
活実態調査」を実施し、地域と  
学校が一緒になって学校の教育  
目標を決定する。そして、地域  
のすべての子どもの教育を視野  
に地域の学校の教育を考えるべ  
きだとして紹介されている。

また、学校づくりのリーダー  
府中小学校の森垣修(元代表)  
は地域・家庭ぐるみの取り組み  
の典型は、子どもの体の発達と

健康を目指して取り組まれたも  
のだった。家庭との連携による  
「ひとりだち」の実践、そして  
老人会・PTAと共に取り組ま  
れた年一回の「祖父母の歴史に  
学ぶ会」と「父母・祖父母と作  
る社会科カリキュラム」による  
授業づくりを紹介している。

さらに、村山隆(現代表)は、  
一九八〇年代の京都府・美山町  
の地域づくりと過疎地における  
地域の再生と学校づくりとして  
当たり前の地域と教育をつくる  
ことを大事にしながら心温まる  
教育に取り組んでいた。府立北  
桑田高校美山分校(昼間定時制  
高校)は、過疎の中で住民が地  
域を守ろうとする活動の中ら  
生まれた。

仲田氏は、常に「子どもから  
出発する教育」という教師の授  
業観・教育実践観の自己変革が  
必要と主張されている。

地域に根ざす  
学校づくり

―子どもが主人公の学校改革を求めて―

仲田陽一

